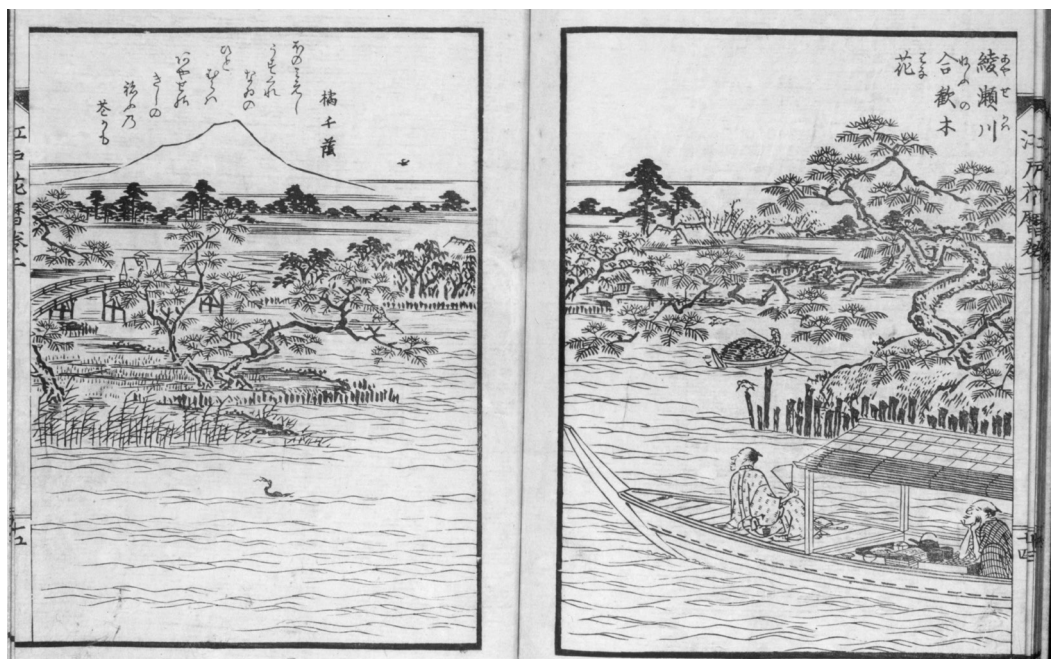


もく やさしき名の名所 綾瀬川 … P1 あだち民具図典⑤ 天秤棒 1 … P3
じ はい、文化財係です②⑦ 茂出木家と煉瓦 … P4



綾瀬川合歓木花
上部に加藤千蔭による
和歌が添えられている。
「江戸名所花暦」(当館蔵)

やさしき名の名所 綾瀬川 — 江都第一の勝地 — 多田文夫

足立史談

第 639 号

2021 年 5 月 15 日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

T E L 03-3620-9393

F A X 03-5697-6562

1 「幽邃」「勝地」

江戸内外に知られたのが綾瀬川でした。身分を問わず人々を誘った名所としての綾瀬川の歴史と由来について、資料紹介を交えてご紹介します。

江戸時代後期の儒学者、寺門静軒(てらかど・せいけん。一七九六—一八六四)は綾瀬川の景色を絶賛しました。「幽邃」(ゆうすい。奥深い静けさ)とし、「江都第一勝地」(江戸で一番の名所)とも記しました。

綾瀬幽邃にして、虫を聴くに宜しき名有り。これ江都第一の勝地にして、四季景を異にし早晚観を改む。雨の淡粧、晴の濃抹、その奇、その妙、吾が拙筆墨の得て状すべきに非ざるなり。

(原文は漢文)

文の後半には「四季の移ろいにもなう雨でも晴でもめずらしく、この、すばらしい景色は文章で表現できるものではない」と感嘆しています。

※天保四年(一八三三)、克己塾版「江戸繁盛記」二編(早稲田大学総合図書館)による。

2 やさしき名の川

■「やさしき名」江戸の地理学者、古川古松軒(ふるかわ・こしょうけん。一七二六—一八〇七)は寛政六年(一七九四)幕府の命で江戸近郊の地誌

を編纂します。花又村(現花畑)の大鷲神社を訪れた時、内匠橋あたりで綾瀬川のことを尋ねています。

五月中旬、綾瀬川のほとりに至る。この川やさしき名なれば、古哥などもあるべしと里人に尋しに知らず、

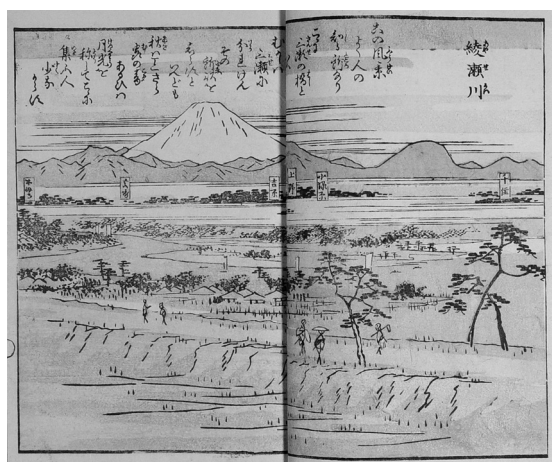
古松軒は「綾瀬川」の優雅な名前に注目し、古歌の有無、つまり古い和歌の題材—歌枕—になっているかを地元の人に聞いたが分からなかったと記しています(後述)。

※「四神地名録」(国会図書館所蔵)

■綾瀬という名前は「水とふち」

古松軒が思った「あやせ」という風雅な名前の由来については江戸時代の地誌「類聚武蔵考」に記述があります。

「綾瀬川」(絵本江戸土産)
「この風景よく人の知る所なり」とある。



水とふちにて綾瀬川と唱へ…(略)

この史料では由来は「水」と「ふち」であるとしています。

まず「水」ですが「あや」という音は「零(あや)す」のことで、『日本国語大辞典』小学館ほか) 水流や水滴を意味します。つぎの「ふち」(測) はそのまま瀬(川岸)のことです。したがって「綾瀬」とは流れる水の測を意味します。この音に「綾」と「瀬」の字を用いたのは、優美さでしょうから、綾瀬川の名前の由来は「流れる水の測を意味する雅語」と解釈するのが妥当です。

※「類聚武蔵考」筆者未詳。東京都立中央図書館加賀文庫蔵



江戸時代中頃の綾瀬川「千住花又瀬崎辺之図」(部分) 当館蔵 地名等は筆者が加筆。

3 俳人と将軍の遊興

学者ばかりでなく、文人墨客から徳川将軍家も綾瀬川に遊びました。

■小林一茶の俳句 文化七(一八一〇)年、俳人小林一茶は江戸住吉の居所から桜井蕉雨を伴い二郷半領(三郷市)の文人、加藤定雅を訪ねました。二人は朝、吉原近くの隅田川から舟に乗り綾瀬川を訪れます。

ときは六月十三日(いまの暦で七月十四日)でした。ここで蕉雨ともども十以上の句を詠んでいます。例えば合歡の花の名所として知られていた綾瀬川について、

古舟もそよそよ合歡のもやう哉

さらに江戸に出荷される野菜や夏菊を見ながら

朝涼に菊も一艘通りけり

などが詠まれました。一茶は榎戸(内匠橋北西の地域)で昼食をとり今の神明や六木の旧道(流山道)を二郷半領に歩みを進めています。

※小林一茶『七番日記』(岩波文庫)

■将軍家の御成 また徳川将軍家もしばしば綾瀬川を訪れます。八代将軍吉宗は将軍就任の翌年(享保二・一七一七年)、綾瀬川の水戸橋に御上り場(船着き場)を設置、さらに

弥五郎新田(現足立周辺)に鴨寄場という水鳥保護区を設営(伊藤谷村・現綾瀬周辺などにも拡大)します。のち享保十四年(一七二九)に花又村(現花畑・南花畑周辺)で白鳥狩を楽しむ、内匠新田(現南花畑ほか)名主の五郎右衛門方を御膳所(休憩

場所)としました。この将軍家の利用は、吉宗の子、家重のときも盛んで元文年間(一七三〇～四〇年代)には三度以上も訪れています。

※独立行政法人国立公文書館蔵「御場御用一件」、『徳川実紀』ほか)

4 人の手による水路

古川古松軒は歌枕をたずねたが不明だったと記していました。それもそのはずで古松軒が訪ねたルートに含まれる現在の伊藤谷橋から内匠橋にいたる綾瀬川は寛永年間(一六二四～四四年)に建設された人工の水路です(西方村旧記)。一茶や将軍たちが舟をすすめた、この流路は古歌(平安時代の和歌)の時代には存在しませんでした。しかし江戸時代後半には多くの人が綾瀬川を歌に詠みます。有名なのが書家で歌人だった加藤千蔭(一七三五～一八〇八)の作です。

ほのみえて うすくれないの

ひとむらは 綾瀬のきしの

合歡の花かも

この和歌は前頁に掲げた「江戸名所花暦」のほか多くの書に、綾瀬川を伝える名歌として登場しました。このように綾瀬川は人々に愛され、明治二二年(一八八九)に現町名につながる「南足立郡綾瀬村」が成立します。綾瀬の地名にはこうした優雅さが秘められているのです。

(郷土博物館学芸員)

あだち民具図典⑤

天秤棒 (一)

■ものを運ぶ 天秤棒は、両側に荷物を掛けて、人が肩で担いで運ぶための道具です。現在の私たちの生活では、すっかり使われなくなってしまう道具でしょう。

天秤棒の優れた点は、一人で物を運ぶ際に、肩（背中）で受けることで重いもの、あるいは、かさばるも



天秤棒で荷物を担ぐ人々

タライ、網につるした魚などさまざまなものを運んでいる。(新撰江戸名所 日本橋雪晴ノ図)



肥桶の担き方

大熊久三郎氏による実演（足立区舎人）
博物館の常設展示制作にご協力いただきました。

のを運ぶことができるということ。また、棒一本なので、持ち運びも容易で、費用もほとんどかからないことです。雑踏のなかでも用いることができ、荷物の運搬や、とくに、魚、野菜、花、金魚などさまざまな行商人が天秤棒を使っていました。

■肥桶を担ぐ 足立区内では、昭和二十年代くらいまでよく使われていました。とくに下肥を使った農業が盛んであったため、その運搬には欠かせることのできない道具でした。

下肥の運搬には、肥桶（こえたんご）を使いますが、これは二つで一荷（いっか）と数えます。肥桶は、直径三九センチメートル、高さ四五センチメートルとそれぞれに大型の桶で、それぞれ、三

十六リットル入ります。内容物の状況にもよりますが、一荷で六〇キロ（八〇キログラムほど）にもなり、一人で運ぶのは相当な労力となります。それを可能にするのが天秤棒です。

天秤棒の担ぎ方には（１）両肩に棒を乗せ進行方向と棒が直角になるように担ぐ方法（２）片側の肩に棒を乗せ、進行方向と平行に担ぐ方法と、大きく二種類ありますが、足立区周辺では、日本でごく一般的な（２）の方法がとられています。肥桶が揺れないように紐を左右の手で持って押さえ、バランスと調子を取って担ぎます。（写真参照）

■天秤棒を使いこなす技術 天秤棒を円滑に扱うにはコツが必要です。

「右が得てなら右肩で棒を担ぎ、右

肩といっしょに右足を前に出す。半身に構え、右の腰を基軸に右肩と右足を同時に主導させ右、左、右、左と歩くと、棒のバネと腰のバネが初めて一致し、重心が安定する」（『日本的思考の原型―民俗学の視覚―』高取正男 一九七五）と説明にあるように、重いものを、安定させて調子よく進むためには、それなりに習熟する必要があります。そのため、担いだことのない人は苦労したという話があります。

現在の埼玉県三郷市早稲田から葛飾区の下千葉（東堀切付近）の農家に、戦前に嫁入りした杉浦もよさん（大正九年生）は、稲作地帯で女性が田仕事をしなかった早稲田に比べ、下千葉は前栽場（せんざいば。野菜産地のこと）で、肥やし担ぎをさせられるらしいということです。実家で練習をしたといいます。嫁入り後は、朝から晩まで肥し担ぎで、最初は持ち上がらなく腰を痛くしてひどい目にあつたということです。（『ライフヒストリーで綴る都市近郊の民俗と近代史 3』葛飾区郷土と天文の博物館 二〇一）

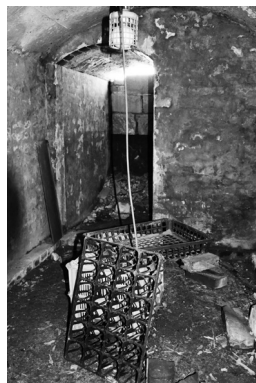
足立区の農家の人たちは、日常生活の必要性のなかで、成長とともにこの技術を習得していったことがうかがえます。

はい、文化財係です ②7

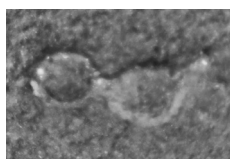
茂出木家と煉瓦



煉瓦造防空壕



防空壕の内部

防空壕の刻印
上下蔵の刻印

足立区にとって煉瓦は重要な近代産業です。新田一丁目の茂出木家には、煉瓦造の蔵と防空壕がありました。ご当主の庄一氏は、近隣の住民や小学生たちに、戦争や空襲について知ってもらうため、防空壕を公開していましたが、老朽化が進んだことから、蔵と防空壕は三月下旬から四月初旬にかけて解体されました。登録文化財ではありませんでしたが、足立区にとって大変貴重な産業遺産・戦争遺産であり、解体される直前に文化財係が調査を実施しました。調査には、本誌六一八号「出土した煉瓦」でご紹介した煉瓦研究ネ

ットワーク関東（令和元年十一月改称）の代表斉藤進氏をはじめとして、二日間でのべ十一名の専門家が集まり、遠くは煉瓦の本場埼玉県深谷市からもお越しになりました。今回は、その調査結果の一部をご紹介します。

■茂出木家 茂出木家は荒川（現隅田川）のすぐ側に位置しています。この地域は度重なる水害との戦いの連続でした。茂出木家の敷地は、周辺よりも二メートル程高くなっております。こうした土盛りの上に家が建ててある場所を水塚（みづか）とい

います。そして蔵には、非常用の船が吊るしてあったそうです。水塚と船の存在は、度重なる水害に備えた人々の知恵の結晶でした。

茂出木家は区議会議員も排出した新田の有力者でした。そのため江北村関係の古文書も残されており、この度、博物館に寄贈されました。中には煉瓦に関するものも残されています。

■蔵 蔵は明治頃に建てられたものといいい、とてもしっかりしたつくりで、郷土博物館が平成四年に開催した企画展の図録『炎のなかから生まれた近代―文明開化とあだちの煉瓦―』の一頁目に大きく掲載されています。

ネットワークのご教示によると、職人のこだわりが随所にみられることが判明しました。例えば、一番人目につく入口の部分には特に良質の煉瓦が使用されていること、湿気のたまりやすい部分には湿気に強い煉瓦が用いられていること、黒煉瓦と赤煉瓦が交互に積んであり、見た目を意識した職人の美意識をうかがえることなどです。

■防空壕 防空壕は第二次世界大戦中につくられたものですが、煉瓦産業は大正十二年の関東大震災により衰退したといわれています。おそらく防空壕は、新田に豊富に存在していた煉瓦を廃材利用したのでしょう。煉瓦造の防空壕というのは大変珍しいもので、煉瓦産業が盛んだった足立区の特徴を反映していると考えられます。

防空壕は土盛りした部分を掘ってつくられていました。内部の高さは一・五メートル程で、大人五・六人が入れる程度の広さで、煉瓦だけでなくモルタルでしっかりと補強されていました。

■刻印 防空壕の煉瓦には「SR」という刻印や梅型の刻印が多くみられました。中には渋沢栄一等が設立した日本煉瓦製造株式会社（深谷市）の刻印もあり、防空壕の煉瓦が足立区産だけではないことも判明しました。一方、蔵からは眼鏡のような形をした刻印が発見されています。

■東京煉瓦株式会社 明治三十年に鹿浜に東京煉瓦株式会社（以下、東京煉瓦）の工場が設立されました。東京煉瓦の社長だった鳥井庄右衛門氏の御子孫が所蔵していた古文書が令和元年に博物館に寄贈されました。その古文書等を分析すると、庄一氏の曾祖父にあたる亀五郎氏が東京煉瓦に土地を貸していたこと、煉瓦の材料となる土を売っていたこと、また、亀五郎氏が頻りに東京煉瓦を訪れていたことなどがわかり、茂出木家と東京煉瓦の強いつながりが判明します。

蔵と防空壕は解体されてしまいましたが、これまで長年大切にされ、歴史を語り伝えてこられた庄一氏に敬意を表します。

文化財係では、今回の調査結果を今後分析し、足立区の煉瓦産業についてさらに解明していきたいと考えています。

（文化財係学芸員 佐藤貴浩）